923
M265

湖月抄

しゐかもと

48

Freer Gallery of Art
Washington, D. C.

白宮　細　巻名以詞號之。白若ハいとも。又若紫大将たる時より

河 物語にハ見えハの世人ハみかどハ其アりケリの中ねとさて有りて

いひつぐあるさく　之 依之有其標之名　細 柳中先云よ雲隠

巻わたへさり古人ハ難義とせり。然まても無別義。河海抄ニ雲隠

よ来あり了。雲隠とは人への逝去のことのこと。古来用来

まり。楼花の則かりへてき也。但紙もの式アりげ奇書かくれあし

秋ハの月かると請ていおみかじ義備よわくしざる說花説物語

も河海ぬもいふかごとく。天台の法文よそしつまり作り物語なり

あハ空道也。桐壷帝と延喜よはまる等の數ハ假諦也。此雲

隠ハ中道也。釈尊の入滅の時ごとく。數此物語の中よてられハまり。五十

四帖皆亦有亦空門之心也。好色の戒を經は佛道よ帰する

媒也とあり。畢竟此雲隠ハ名ハかりよて不書之説家可然也

之。數着物語一部之中。義情をうけ人さ海くまて書つくさ

7152

白

より外に源氏崩御の事をかきたらば言語も及べからずとて
又同じき巻の事なるべし仍異本之作者の趣向玄々之玄旨也
幻巻と此白文の巻とのあひだ九年なるべし匂宮より作
薫の年齢なく年紀をしるす也幻巻なくは又第之今年
十四歳なくえ脈のちがひは第より十三歳までのちは
雲隠の中にゆづりしるせり然しく宿木の巻まで記
雑乱をさり別にしるさり花鳥十四歳より十九年までの
ことはりとあれども九歳の差遣の事見へしより

ひかりかくれ給ひにし後
細 源氏崩御以前をいへり 諸
花 光君隠れ給ひて二三年の後此巻は
しるひて二三年の後此巻に
み巣遊しひ給ふを
いへり
かのみかげに立つぎ給ふべき
へ 花 源氏君の容貌才能
なたき世徳化をうけつぐ
き人なき源氏の中に此君を
二而曰
おりゐのみかどと
細 冷泉院源氏の御子なれど
けざやかに源氏の子なりと
いふべき事にあらざれば
さしおくなり
二 此句と薫とは普通
にすぐれたる人の取る
まじきにて根本
うしなふ源の御末といふ
皆一つなるべしと云々
は源氏の幼少にかはりて
ことなりしも世の覚えは
まされりとく 細同義

ひかりかくれ給ひにし後かの御かげに立つ
細 名君の由まで 二 明石中宮旧腹の子なり
ぎ給ふべき人そこらの御すゑ〴〵にあり
の中に合せり
がたかりけりおりゐのみかどをかけ奉らん
細 白氏之 二 源氏の旧孫明石中宮
はかたじけなしたうだいの三の宮その同じ
文脈 三 六条院女子白も黒も一斉に見る 細 女三宮の腹
おとゞにておひ出給ひし宮の若君
腹の薫之
と此の二所なんとり〴〵にきよらなる御
名とり給ひてげにいとなべてならぬ御あり
細 接辞の人はいはゆる也
さまどもなれどいとまばゆききはには
おはせざるべしたゞよのつねの人ざまにめで
たくあてになまめかしくおはするを本とし
てさる御なからひに人の思ひきこえたる
もてなしありさまもいにしへの御響きの

きりつぼすゞらひよ　白氏の注文ハ帝ハ母ハ明石中宮也姫ハ女三宮父ハ六条院なり
ちん今父[illegible]泉院の御出生ならるゝを見り
ましへにてよろしく
師なりくハあとゝいふくゝ
紫のうへの御こゝろよせ
女三宮ハ一院紫上のむすし
あひて二条院にあり
きんすく

しへの御ひゞきけるひしよりも。やく立海き
まとへおき見てしらうんぐさんハこまおらい
つらしうりろ紫のうへ乃れんしもこうしくかそ
うくさくもそ絶しゆへ三の宮ハ二条院におせん
しまけす。御子めぐとたんきうやへしるゆきとりのよ
とさなりおそこらにこえさらにいそしくろ
ちうまきうりつさ中てきせ給ふあれバいを
う後をまかせなりまてぐすしんゝやもとくさ遊つよ
そこらう志給へなりそう。おい見服しまくらくハ
兵部卿宮とまて也。女一宮六条院の南面
ちの東のたいとそしのまうくひとおりく

つぎのむそうげりめまそ
花今の東宮は位につき給ひ
りで此二宮は坊にたちまふ
ふべき乙宮ハ后がねなど
いふめるし

嗟　大姫君は[illegible]
つぎく
宮へまいり給ふ中のハ二
宮へかよひ。まゆそくえ

めでおいしく。おさこえま無二思ひ給へし給
二宮もゆるかじゆくの志へ厳也。時々の御
まどそらうへしまて梅つぼをたもぐみし
よおもて右のおとゞのゝ中姫君をさえ
まりまへりつぎ此坊がねしそ。いとれ
ほえしくよゆるしくちうひとりとしくも
もとくよりうすんゐの給ふゆかりいとも
のくれしきとめハいとおまきうりの給ふ大
姫君ハ御宮まいりまそて。すくにこうしろ
ふへるさうう海みくさうしひ給ふ。そろ
つぎくされつおそのまくまごそくと。
世人もやひへきこさいの宮。日の給も

うけつらハ　細 まことに
わきまへごとなきなどいふが
ごとし　孟 夕顔ハ黄昏の
の物語也　又君来るま
まに入なんとぞ　わかう
日やうなりと辭退せら
あらむ事の夕顔也
んとぞのまゝにてよれど
ゆく

六の君なん
花 夕顔の女也典侍の腹也
宿木巻に見えたり
如此

されど。あかざりし夕顔をつゆわすれ給は
ず。心々なる人のありさまどもを見給ひかさぬるにつけても
あらましかばと。あはれにくちおしくのみおぼし
いづ。右近は。なにの人かずならねど。猶その
かたみと見給ひて。らうたきものにおぼしたれば
ふる人のかずにつかうまつりなれたり
わかうどもよりもむけく。いとほしうて
づきやかに。須磨の御うつろひのほどに
これをとものがたりまゐるみこ達上達部
の御心づかひをおぼしつゝよろしき院
うつれまで。後には。つひにさりし
うしろめたくよかりなんとすなる

いまゝで　細 明石中
宮を秋好中宮にまさ
らせ給はんとて今の事
をのたまふ

いかにしのおもひとはべる
ものを
二 華清宮の数漢
家本朝一条一落ところ
くのみとしそ中山も東
六条の融公の河原院を
おもふらくし

いとよきものくち惜しくのみおぼしよ。花ちる
里と思しし東の院をぞたゞのさうじみ
ありさまもまかりよりのちは。二条院
のうちやよかりしかすいまださしをかれたるに
乃まゝのひまたへぞ。院のうちに
人もぞしるおぼろげならずのみやびと
のうへおぼしいのちのあるかぎりにとぞ
も。いかなる限の世よりとゞめてつかう
しめさせ給ふ人の家ぬ君ハ。かねをおぼす
うらすくなくらればかりおもひひを
ほのめかしたれば。いとあはれによ
からんさとしらぬに年ごろのかたりなん

うしとらのまちに
細 花散里の住給ふところ
孟 花散里ハ東院へうつり
住給ひけりて 薫
なとうしろの町より
うつしすみ世まろく
あくかれは十五日つて
花ちるさとの御方の御との
書給へのかきつゝいつと
うつりにし十五夜つ
おりしつれなくせうかり
くともうつるハまあの名を
とりてといへるよ合せ
つらふべし
二条院 細 明石上方此人
むかしあつかひ給ひし所縁
世にもかくれてそ二条
院よハ自家六条院よハ
五一家二家あ 住まる
まうく

六条院
くぐりじゞまごの院あらさず。御ゆかりの
河海 日本紀大路 万葉
ゆかりなどひとゝけられたるまじうと
ならしの路をそしらしとこのまゝにたら
薫弟子
の一条の家をわたしまいらせ給ふ。
細 雲井雁之
三条どのと、夜ごとに十五日づゝかよひ
うかしひすゝみ給ひ二条院とそつくり
ところ六条院の姫君よそ世なり
三明石のこと
のもの思ひもしつびとりのれ
すゑの末めでたりくそしてまうしろ
れうさいおほさこのみやそう思ひれうものゝ
孟 夕霧ハ源の御
とどしつくあそひまろまつりつかいとよ
性を五段歎心あるまし
いつゝさのかくて親しも昔の花くもさり

細 紫上乃
きさのとろ
明石の二宮はじめのごとくし
て御しまいらせ給ふ
くらひとなり

世のたのしみとをから
評 河海よ経文を引そ
れぞいこかなきり
河 佛此夜滅度如薪
尽火滅 法花経

のましまもくらゝけりてしらつく、おわする
冷泉の院
さおやぐらまつうりまひろふかりにさいの
え人のみゆうおもくとなりまうくる事しかし
ばいりそびかりにろはつくしそにいう
まうりてしなししひつる日よりいつそうと
とりわきそて我ひとをしてえうのかへきさ
らくりかくておまひめしこと紙からか
しくおもひすられしう世のたまきにて給わ
住之
めでたきこの人院をひさとてねかくこ
まうくにつけてもかせのつきたいとれゆかれ
六条院二条院なとのうち
ありらよ何ばかりもなく心やさしたけさを
きぬかりなくりしまして後のうちに

こやすゝめらし
秋好中宮明石中宮等
之二之三之なとの事
下

春の花乃盛く
細 紫のゆかりぞめそめし花
さくらし花乃いろし
院のきらゝしつけ
孟 源氏の葉をとりてそえり給
へと冷泉院へ申しふ
ようそのゝく[illegible]とする
天下の形をあらく光明峯
寺を始志称院の御記ま
そし

明石上若菜上一の巻
人ぐれもくやうらあでけさうし
三 源の御子八宮くわし及ゞ子とも
ゆもしきてしく限なくさ流くしど[illegible]
りのゆくきくさらのむしくされのしけいき
院いとくらくまたあめくく第のくとふつけて
ゆつ
あ為めのし給ひもあけのゆかりし、春の花乃
花宮 素性なくへ許り書き事
蓋しくしけしよあしらぬおしも、第くしまさ
孟 若菜上巻下二一帖
ごの猶よかくん、二条ある方の方、院なさ
こしつけあくりしまのに、冷泉院のそ
細 秋好へ源氏意
うじくりおそれわりしつきてきさいの
のきとき多くく
あしもみこちらあどおりとのくをんか
孟 秋好の御子をあれた帖及に[illegible]
ゆかやさうしとよまつしさけうさあくら
若菜下巻[illegible]
まとやうよさのさとしまつりゆえ服

十六才二月よ給位より
なく 細 元服十六才の秋
中将よ住とまへ学問
へ行門まつそ本記の
歌遊わりるえ只十四才
の秋中将よ住さる義て
なし 三 自侍従任右
近中将例 粟田関白道
兼天元二十二侍従寛和
二十十六右中将
いでこのくりしまさ
知りけるをさとらる
ことよ早道よ参進し
めたく 孟 自称へよ都
渡らせてとく冷の葉を
法切よ云そし

若菜上元服して十四の年二月よ
冷泉院へ
るすしも院ゆるくをろさせ給十四のかく二月よ
よ位給
細 冷泉院
御後よかりかゝ給秋のくゑ中将よゆかく御
の
の御給へ四位よ叙むるとて
しうじくりの加階あらとまへいつこれこて
ろりしあさきかりたくるくあくてゆをおび
孟 若菜
とふかり
細 冷泉院つくまめ位を給へ
あせ給おりしゆすゆくじちくさいえを
葉の曹司へ
三 冷泉院へ
ざりしよあらしひあじくらぬゆらん
葉よ参らのかく
じられくまうくさ人もまいらへあへん
孟 女宮をつかる
まづくもとられよりとえりくしの人女の御ある
まよりも葉と應くにりつきまかく
しらくらもゆかしゆくらくのへさせまへ
冷泉院
里よりもとやめとまよふふ女房の中に
秋好中宮のうち
もくらちよくあそやうよめやもとさは
葉の方へ
冷泉院へ
これらしきとさせ給へ院のからを

うたてしの思ひしのぶ、
細 冷泉院へ御子もなく
おはします故一所へ御子乃
秋好泉院へ参りて御服を仏
徽殿も此方に御服くだ
しつくさる事も候ておほ
とけなし 三 其心をえ切
にはあらで女一宮に勝
事なきさく
ささいの事乃
細 秋好
中宮は冷泉院の女宮
をつぎつぎ御子ことを
とらせ又秋好中宮も
薫をそのつきまとて
すぐれて給ふりし
人の見なりしを源高後
何 二 薫を秋好の御
おのづから其より冷泉院
の皇女の母宮に 錦先宮
御自分ならる 上脇秋好
の御前にて御身より

薄雲之
心よりつけて、すこしうちわらひ給ひて、御のべ
くものいはざらしがおもしろきはおもひ給ふさ
まはかされしまへつゝ故致仕のおとゞの
乃女御もさてしも御服して女御更衣一
所おはしませど、御らうたげなる御すぢ
にものこり給はずとぞおぼしつゝ御ものは
おほかしの年月よりまさりて給けるひまこ
そなたざまにもいらぬ給ふがなにぞ
母宮や今はさながら心みなもおぼつかなに
しまで月ころはおはしませばいとあはれにて
御けしきはいとおもひきこえさせたまふに
くちをしうてこそさればなにかはひきかくし

細 女三宮之
三 冷泉院の女三宮を
土 秋好

ぬかずきてうちしをれ八つ白とさき
なしくわしくいふまでもなし
御何のかくしやらるゝ八薫をとてなる
の年月にまさりければ
まほしきに八薫の見え
かしをそなへしをつく
とく御心花の御後ち出
さらてた后の年月に
かゝるおもひおさめる
そういふゆゑかしを見
あきらか見へなんへて
くちにこと句をのべら過
の御事に秋好の御威勢
なくこそもとの女ひさし
まうしことにもかへし
とく細花の御後二白ね
またくさのべされ

三 出家の御事かなはぬこそ 秋好中宮の御思ひ
此の公ほどに後に給はばとの心ならいまいし
益 薫と女三宮の上のまゝ
此君の出入給ふ八かやのゝゆかしくよ
りけげにのもおしきれいとおしく院
冷泉院
薫の女三宮を思ひ人
みどころもなくもつき
今上之
武部白中鹸と此の中宮の御服の事を一よくし
つぎのこやさらにもなし源氏御そびさと
薫之書
さいくれどもまことにひまなき事も
うそいひく身をもてなれど思ひ給けむ
かまへてらには御の事ものしゑのおもかく
細 柏木のうせ 二三 宮又八柏木と同じ分の事とかけ
女三宮と母宮ともにみつへ此かへり給ひて
いぶりし、お心ならくは見えぬれどもおへき
女三宮は八薫の御ゆかしみたまふ
人しるしゝやかはしもの気色もそ、ゆき
まなりしよおぼされんことつゝましくすら

せんげうすう

細 他流本ニハ太子ときあり
善巧方便羅睺羅別名なる
あるべし未決のことなり
さる故揃よくうたふよ

耶輸陀羅氏
出家之後經於六年誕生
大智度論云耶輸多羅
抱見是大投之金不燒是
則誓言也 法花經云耶輸陀羅
ハらこうし也佛出家の後六
年まで生給し故は人疑ひ
かり 太子の我をどひぬ
く人侍しに 此の御子らこう
のわくしたち 耶輸多
羅とし 然ば佛の出世の
時瞿夷 二說
二說記 二云大論十九
云耶輸陀羅菩薩出
家時自覺懷姙菩薩
六年苦行懷姙亦六年
云也 涅槃經

すれバよくりのんよりけていふありけりこ
とゆうハなるのちかふりみやくうらやまうくね
ぞそひてる身代しを蔡红乃人ぜんげう流ノ
の我身よとひ乃人さくりとえそしけれと
そひくりこしれ給ろ
山がりつる様よとはましいふしてけ
めもそても忘らしぬ我身をつらんへさん
りろのしくるよかれて我身よつがあふ
こうらするもくてなしれ抱きけりしく
のをぬひめくしつくやもりくさり
のれりしうらとやつしますていのでろり乃
而在んみろくろゆはりりまとりむさ給くん

因佛還國時 父王嘉百味飲食及歡喜丸以上於佛佛令
送食直至羅睺羅佛之
ぞとふくしと給也
しかつる 細
是も太子の事なり
るやう六年苦行
六年をへて
の御子と云人
程 二惡の一世の
とりてひとつ
解く
いんう

蓋 細 二日晴亦同

よ盛の我とをいつ給ふ
うへしうく
よ八宮ろをさしくすへ人のるさきなかり

[illegible]

らうたげの御ありさま
くは 孟 蓮葉のおなじうてなと
まちわたりし 若菜
下ハこれまでなり 云々
いつのまにかし 細 五障
へだてなくとぞいとおぼしく
おぼしとける 金經云
くひかへし 法華經 女人身猶有
五障 一者不得作梵天王 二者
帝釋 三者魔王 四者
轉輪聖王 五者 佛身 云々
提婆品

おぼしけるのちの世をまつる
此世にはおなじのひかりを
かなしき事あるれば柏木
人の御あはれを後世をさだ
まるひはかなき事にあるや
まてせんとも

とふ頃くれつらぬ給ふやうなれども
かりそめのうちとけ給ふ女の御すさみ
にもあらず 細 いつのまにかし
給はらちすの露もおなじうてなと
そうじて給ふのみなりし 孟 若菜の御
とも 世の事ともにいたりてはこの御くら
ひ 御ゆかりのなとにいかなれど
とはすけて おなじうへ猿の世のゆかり
をかのめすさ給はたんをやうそつらぬ
むなしうなれてやうなどとせしくらう
へても人のめんを御ひとかたの
服は柏うら給ひしかど 孟 まかてひと
のこりし世中はありてなまされてはゆき
まかくなるやうよりれ御身のうらしもなか

よつはずのこと思ひがけずもこのしりうたて
をとくこなたの御しつらひをしつらひ
くていかにも衣かりのにはかにはかなき
のこりやちるさくりにもひかりいひ
こやさかりそめにおはしてはかなびき
まよしかれおもひかくるほかに心はしぬ
しかりておぼしおさへてあはれにも給ふ
うしもえんどもぬしく院の御こと
とおもむきてしるべつべきいとよすがら
えまつりこの御ことはわかれたるこそ
ちかりもこの御心はべりしかやらぬ
まろすくりてあはりしつらき給ふ

つみよけくるしき世乃事く
せうれ　細 在迁の事く
陶家ありしえ恩ふく
饒と轍もろやうよ仍り
よ恨を拍し給ハるを
いろ男と食しあへ夢
腸のるしく无說如
何

此泉えまうしうに
細 菓之義柴芳邑もよく
きこゆるく孟葉の爲く
ましまをしも世の業く
あらく

思し出しハさらまさることなき哀しなから
細 弘徽殿の大后二条大后などく
その給人はひとしくしてれうる
ろうくなじきしよ。清 一源の宰相といひし人
くなき心も猶あく
三 宥字之 伽なとくよなろう
中を出かしるずうしめし猶よるしび
れ ひりとハまはゆりしれりてしづめおふ
弘徽殿なとのとの女人 婦は源氏の大迁のうえ
つおよさりいらじしき世のとうれも御集め
りうしともこしるくもとうまひく 細 隱
の陵よ隠居まうせえうり
世君御つらめともどうりし給えすよ
細 わらあし栄を奉らりおへりと
げさりげるてくしくのどけさはらいと
てよるそありしうこの乞へましうさよ世
の業くいとすそあわりゆうしくことよ
三 菓を六関係まて世よ出現の
くおしそ抱し給げよなんくそしいとし

りつくじくけりうしくとも
ほかり 孟 菓の所ハ化身
のやうるうしく无佛菩
薩のかりよ侘胎して人
界よ生をうるをとうり

めうろえしき
細 大品經二十七。八十隨形好
よく四十二者毛孔出香氣
四十三者口出無上香
三 聖德太子直一抱太子
數月懷香 異朝有例
愚按太子のよし无亨尺書
あり 異朝よハ宋大祖皇
帝諱ハ匡胤洛陽の夾馬
營とての所よて生れ給ひ
しにも赤光異香あり
一月之人られを香孩兒
營といひしるし

世の人をはつくり出ざりけりとこそよや
どれうしくも色くしくらひきまくり
おとろしも、そこはうといづくしおんとこゝれ
まなおれきうしくしるあり所もるまとうぢ
さいしる海めしうるづしけよ心の
行く理をりげるけらひ人よ侘ねるの
香
名かのうくくーうそ此世の匂ひすくぞ
めやきらくゆぞくうろあるひまつる。わる
盃 葉のまひ風と
しくとく蒲うち猶のとひ風しもまくしたり
両 百歩香
百媛のおもりりのおくきむらしまち
佛人の思のなりうこしとく
まされもさはりるぬぬうは玄様の。いし
盃 あつのもくまうハすしく
やつれぞこ。うでありちるやハおろくとこさる

かく思ひさだめたりとも
細かにいひなせばひとつ白
ひもなくかくなりと見
孟薫の身が白妙に
よ人にいふなりけり
めでたし

とりなりて袖のけさに梅が香の
何事かありとも香をとめ
まして身の宿られて袖に
れし昔の梅のかも
春雨のふりくるとぬれ
花にかかりの名残の雫に
移りたりし梅の香に紅
そめ出たる 桂香
ぬれたるに露に梅
何事かあらん香をそよ
かく重し秋の露も
ぐさりけり風なき梅そも

が梅はよられひとよはまだしらんと、つまるひ
見えまよふべきめかどうくらつまりたるかくく
さらに思ひ出しらんも池のへに梅も見えつ
さ月のめぐるのかくれあらましきこまよふるが
さかりてゆきくれもつけ後につめども
細白がごとく露香に似たりとて
咲　薫香をもそへてつぼみ盃同
まさのおもひつよふられぞうくの
かくりしこの花乃いつもしくるこら香ひ
　　　　薫
　　　　三　こらえなくの香にかおり
とられたるがまん花の木もとらずくも
何心もなく
でらけ給梅の香へ春雨の雫にぬれ
　　　三　香よめづる 春雨の雫となりて
ならべ
身をゆくかくへ秋の雨よめしける
かぎりなく梅をもしのかかへりてしきる
つらしく逃風にしらよがりあらくらへん
他に異なく　師　薫の秋を添ふなく

師　此頃ともしたなるくうらくらくよ
りまの方かるかくれゐ
人のかくれの香よ
何梅の花さらばかくら
つまりしかの人のかくれる
かまぞしきめぐり
かりと　細　薫花く荷葉
梅花香じいふかくら
孟　様く薫物を調合し
て白妙の花香めでる

ゆらく何心かく香れる
三　以外の香と思ふら秋
かせそのまへ見えくねど香
しきまかけ逃又お香にはいかに
秋田かかりの中より
らわかまそでさけり秋萩
かれどありねしかなり
よいかかるもまそこに
薫香よいかしば何心を
こつしかえく花らなよ

かくらうすせらり
細　白のかくくるりの香が梅ぬく孟　薫の白ひよそれて
まさりけりしあやまちてもまで人のどが
仍りうるまでくるとさかりまるまれく
　白妙の薫と白ひどかくひまなく　白妙ごとき
くらうらもりまれくてそれいさ
しそへて
ぶしよりのそのくれさらくさめ
多能夕のこしわぶよわるせいしるぶが
まくの前栽にも春は梅の花園をそなわ
　　　　　　　　　　　　　師　とも香へし萩は白ひ香る花に似
給秋は人の人乃かずが若ひむ下さく人
　白妙の花くしめまくぬる
つまよまかく萩の露ふも咲さくけん
　　細　三隅　若ひ
つし給ひず花ともすぐしてよ咲る
ゆくみゆそ梅りのけるされて
うるどいかしする梅じき春かぐれの比

ゆきくらしまかれとも文字を清てかきうつしまかくしてかくは松亡 細川氏
花をまもりてくらく は皆人の花とわかとしいふ菊て百年とかきおきまかれ 盃川
前頭更有薫條抱老菊 衰蘭三両叢 楽天
そのけるゆかれともかう
白ひきうかう 盃川
花 披衣武蔵野の菊かれはえ

ひまなくすきてかれしるかしわかしめこそて
うかめつるかひとなかんとそくこのめのしうかえ
しまるうれのはしるよしまうむひや
世々の人のかて
つしさすゝそてすきさうることまひつ
ふきへつきしも世人ておきつしきり菁乃
源氏のもくてくしそくそのしくやう
かくりとかてまつるうしてるかうしり
源中納言家にはつるしよりつゝ松ひ
あしうものしろまのくめねよかさもく
けゆいしおしうれなかさしらふりけ給

むかしの源氏を
三はうつらむかしといふる
多くおきりつしくしく
人の月よるにかる八葉と
しまうも十おりて撫
くさ人のいまめく

かうしくしうさ 異本かん
こしなきとおり月影く
ふかくこめられさくし
こら
白菊の葉おくと舞まと
心くらめうして心ひきる
まかとく
冷泉院の一家とそて
盃彼仕の女乃弘徽殿で
らのかく

つかさ人の中にまかん例の世人ハかかりふ
おかくかりの中ねしらすかつくいひつかれ
そのたまさしてめかりすりやうらくかさ
我てはらうさこめきよろそしつらる
しら給もかれハ家のは御くよゆりしう
もまあへきりうりをはの給まりて人
のれけらひまは松をも奥色より給のとさ
とれらまつけてゆかをそることはよなうり
冷泉院の一家をそさかうかくるも
まなりつやうひまるんりしし美しさう
はは母君れもいとをめくらうふくくの
しるおくうかく姫君のはけるひねま

ちくさにめでゝ
三世とつらぬかれけるを
貧人雑がこゝにたがへる
ともてはさみやな
らくこの月々

こゝわりなくもくれくしきそのさへてしく
しらぬハしきみすゑおもしてもこうしらくもさ
みしひきれうる女房なしのかへらしきれを
様のかくるゝみれて中しつるあるるしゝも
三白文の心
のあふへかゝしもさこんかりけり
わりよいつくし悲びてくおがりとへりめりゆ 盃宴より
ねハ世中をかくあらざるすさ猶しの心さしも
ましうらふされバ中ちくうらみそとめとく
刑もされがくてさもやおかんなどもすゆ
大将て随世の自由なすまじき方の事也
ぢからつうさもわかんおそうりよりくつ
そんハへくましくるなど心をそて給ふしおくさ 細書よ地へ
自からよみむ人なきわりりへゝ
てそてんよきいべきこしのるゝさ何しさ 盃宴へ
どそゝくく
しぶ川めやわりりん人のゆうしみ 三

十九 よめかり給ふ
細 葉に曰くり十九さに乃
あさ宴よりへうり院の
春宮入内とありて兄弟
のるりのき 源 院の紅梅書き
ハ又二人ありて此兄おのゝ
くさ併ふるあるよ年紀
の雑乱勿論く
三位宰相にて頼中将も
おわしけり
おさ此晶 進善 三位中将
あく しら宰相よ但し
三く宰相中将よなりけり
く 師 此宰しう権宰と
宰相中将とつる面此番を
入 ことれてきからうくて
その心くろ拙よみなけ
細 摘本のくろすへよある
みよりてん探をとある
つうしく三史法よてへし給
へりかく
ひろう院のしらま 細 葉冷
泉院よのことさふらう給
く 盃 葉もて女一宮とも給

しかるにハさりしてかむへらもあへ川
十九にて妙給ふし三位の宰相にて頼中将
をもろされ給ふも。こゝりと后のみりそし 冷 秋好
河伝 日本紀 人なり
しまうく人かくハそぐりあるさ。めぐく
さき人の世間にてそのしうへまへどとんの
師 柏木の事
うへまハ当なを心をいくさまてせ摂表よ
あがりもおりきれど。へまよきうきそもあら 葉のなさこれ
あろりすくさし。よさくこのまびまきよ川
のとしりてあしいかうてそのつつし拙しもそ
けなうころな陶をど人ふもあくれぬうり。 二条后
盃 白文 院の女一宮
三宮とししはそんてへとやくき給めで院
の姫宮乃おわすりどころみも。ひとる院の 葉のく

今泉院ゟて主訓あらく

一 むらみのもらん人へをとこ
二 此世よんしむへくハ此
文のみぶとゆそてまつり
してつてゆく

あなぶらふとまぶらひ
河 交女系 ミシラヒ 日本紀
孟 葉を女一宮よへぶ川
あやうふしまへばこなる
ようりもまいらひ蛍名

うらよおもひけれ立すれのへだてしよふ
まてもし人のありさまを史ことなりまけ 廿二丁の内ゟ
よいとえてうしんふめくつゆくてし
さればそうし限なき後からじくハげ 葉のらく
よりやうすし人をうんよてそいけり限
のひゆくべきつまりすれと思ひなげしぶへう 冷泉の
さここそへだ川なこしなすくそれひめ 葉への由ありけるけて 女二の宮のへ
うやの地なさぶ西のへだてにうしすけと 二の宮のかくかうす
とくなすしへさせ給も。しくらひさび 孝標く 葉のらく
らうきれど。おなぶらふともすらひよ
らんめしつうしみのらともつばられ
もしもいとわしうらんべき。とく。おもなりし

まうがわく人よめてられ。
呉わかよのすえ借んしり
てられんとさうよハめ
ぞ有為の風流し細云給
の風情え人をなひさや
とるりむよあのび形を
おかうんへきよんハとあさ
ましハさるく
へのこめよてとしくしし
二の宮こて葉の次遍形と
人の知やうふみも志るし給
びどぶれえろそ附めり
まこゝかく

三条宮文 細 女三宮の源方
なり。高さうみもみ葉
の次ありさ高をえるべき
のらく

抱すれしうこともすうりけるし。わがめくし人 孟訓考え 弟子説より
まめでしれんと如すくる主給すれべし 仍云ぎりく見へうるろくく
うすくなげの主なぶとらくし給ありう
とこしすくりてそなまくこうつたく
るびきやとなる限じくよなのつしきを
ぎりのかしひ形をおきまよ御らさんへ
しあよてくしくなどりそうさればいと
よくまをしゝ ぞそこころしろくなさけ 二葉へ立ハ
なりぬ給の中しんやまもしさ我思すれ これらえて我心の川ちくてふそれてし
なん人へいうきみとれつゝ三条の宮よのまり 葉のらく 文つくのかへ
あり川まうハ面おうさありつれなきさ儀ともも 句よ中に給ふ今より雅面
くらしげなうれぎなめれどいうえすみんうり

ことあるまじきことなり
おぼえずうち出でたる人の心をもこえけることは仕出るなり
流
さすがにいとゞあはれなり
御つれなきことはいへども
さすがにゆかしきことと
心をのこしつゝ
細 人に心おかれぬべくは思ひ
わかしき 孟 情ある人の
気はいかにもうつすべき
ことなり
人の中にもわきて
孟 夕霧の御心をさとめ給ふ
一人は薫へ又匂宮へと思
ひまどふ

いとこゝろ深くこそおもひもかけて
まじきことの人での心もすゞろなる
このえどもけしきもおかしうなり
いとなつかしきこと御あるものの情たるれ
ばにも人の御心をこそおもひやりこそ（薫）
きくさる家のおもしろきに世の限りは細かなる
（細 女三宮の薫の心中に思ひあたる）（女三宮は薫の御心の中をおもひやる）
れめかれもけしからんどもされ。みな
（まづ薫はいまだ夕霧にはかたさめるべきか）
よしやひのもとへ思ひのむすびも一のゆかりの
しかれどもおもひたまへひとつくさとも
ぶしかるかへてはいそかはつれどもさす
（孟 夕霧とは薫とは兄弟なれども）
がにゆゝしけるさるうちひそかにとは
（孟 白雲之人は哀にて一人は夕霧の心）
（夕霧の心）
おもひあらはしこのみじかとうて 細

一条宮の
御方はさうしくおもく
おぼされ六君をそなた
へまかりそへて 孟 落葉宮まで
見る人ごとくまして
人の心えあらん人の目よ
いと深くつけてありなんと
侍り

かはるがへひなさるべき人などもいと（細 雲井雁の腹也）
きよらはと思しけるやうにさ（惟光が女も女房より夕霧此腹也）
まりも同腹のむすけたちの六
君もれておうしげなるべきを
ひとつ姉ひ出給ひとられ思しの御
（典侍腹の姫君）（惟光の娘）
海えつくさししもうくわらいつぞ
（六君のこと）
かしら思して一条宮のさうあり
（持）（の）
ぐさもまへられてさうしく
（孟 白雲も薫も見せやしてさとし）
ありてありぬまへつまわらぬこと
（夕の心）
せんでよここせそめてはかなく（六君）
めぐらせん人のありさ海とも。こなる人
ここはここそあるべきなれるぞ

いつくしう　細　さの三奥
徐ずらかしまてなく
孟普通え人まみんせぬ
ふまろうどこれえらつく
しくいあくらんのみそん
ともつらやくうつまあそ
のちらものくうりあるし
細叢花女の正月之武時
夕霧太夫隠まてなまる
うつ例あつるまするべし
酒懸射儀和天皇貞観
二年正月十八日賭之賭
ちう八天子弓場殿ま幸ま
てあらをは後で仲ま
の月ちらえらす礼記ま
てあうう四府　左右近衛　左右兵衛
の舎人射之おお大将将ま
の養をとら帯黒て饗ま
ちふて近衛乃督飲るら般え
新正月賭射そてうら別
いた大路の里亭して選饗
しいみうすをまて南かく
此陀夕霧太夫局庭大将
[illegible]これを[illegible]

三 厳冬の心
いつくしうえもそあし給わむし、いまあらうし
くおうしさやまうよりのごのとさらせてし人の
米寺るとき熊路させふとせつさえしれる
年まふ人之
人つたんらうりかわくつくりあふ給のり
両選饗人をりくろをとつ之師　前てを開き十給之
ゆきれくりわりしのまうけ、六条院まし
夕霧之
いとんらしまあましきこなともおりしまさ
せんのうんつづひしまつらそのほここく
師賭弓日苦中まくし
ら地くみまおかすろハこれさふつくひ給、さ
細定
中宮の御服之
さいらくのもいつまとをろくけるくらく
きこけおおろしまず、中心きこの花の
白い衣之
のえめハけまいてもくれてど、まあらえ
今上の御衣
まつ、宮のそこ、ひくらの衣めと此ゆらしな衣ん
らのまいるしまやけるひいてまるのとじと

まけるの人ハ少早おまら
例く墨色宰相中将ハまけ
ぞくえ
きいのれ　細　此指貫左右ま
ろうてらる口大臣左勝之
結合韻ふくさみるれ
の勝とそて例のとうけ
おうや　細　葉ハ右之坊
宰相中将え
ぶこまるよらつてうろ
わろしの事へてむうそ
ぶろし孟奥まろうとの
近衛右えくらわるしに
まじらる義し

そまくり例のたわるらうようらね例
まりへとくとちてくたれまかうて給、然白
細夕霧之
アマ衣ひくらの衣、君けしのみ乃をやと
さまい明石中宮服中勢衣之
史衣服之
の
ひとはらを海まえのこのせなりてまそ
菜
給、宰相中将ハまけ方まて、やとろうくまうそ
給よきうをえてこうらぬくしまおすれとく
葉ハ夕霧の僧く
つまよ衣ら給まじやとどしとくめさらをそ治
細車ならり
夕霧
みの出つ登、権中納言、右大弁ふとじさしぬ
君の兄弟之
青表紙二八七
上達アわうさ、舞え度よのりまをりいうざ
これ　これ
ときさんく
すひさそくハ垂纜へおつまよのゆく給ふう
よ音いくさしうちてえんまう、ふえそれ時
せりのくあかりしらはよ、みさらそあそび

ちん疲の南乃ひさしよ
死ひさしの處は中が抔ハ奥の方まつたく孰亜ム郷
ん謡まつく兌と八垣
下の處ちふ中が抔を
避戯庵ちる詩律のぬく
咲垣下の悪室せうきの
ゐとまハあちらがア中が
ゐを鞍くしてそあ乃
人をハ抔律のゐく徭附
のしあこせんひろく
細風俗の屋をとめる
のしめこしらへろうや
汝ハ八ム女風俗 拍子各六 合十二
やうをとめハわがやをとめ
ぞとよ何やまとめよ何や
をしらあ二段袖のますす
このころやまろうよ 袖のやをとたちうろく
多好方 表子の奇 拾遺集
ゞ鼓
さしめて平野祭りよ男
役まそとに時うよべきおり
とそしまろ大中臣能宣
八のまみろひくの杖の杪
あらじとせしもやはりよなる

てつり給ひとげよこゝと亜てぞいぢょすむしん紙の
跨の所所仏亜の宮ゐろよく初音よ注ス
消亜ふうらやうのおうちつのぬやら下紙
すさめんとみてさらちんん疲の南のひさし
ほ必常
まつりのこし南むきよ中がねつさわへう。
細垣下く漆律のゐく亜垣下をゑうくしとて
わむきよむひくろ入のこゝろうゝ乃まを
のれ處からはらうしけるをとらじきさって
笑ろうあーのの付表子と二将監ハ
りの面白くまつりよおりしめて舞てう
下筆く云
まれうろ袖九のうちゞくをち風よ法気ちう
神ゐる尾もからのかすきろうとよ似
これハくく
さ梅衣ひとひとそでこゝろびてあれうる白
ひのぞしおちうまされうよ例の中ねれ
亜 葉く
れろうのいとつしくりそでやされてい
ひとしたる面めりしもりしよのくさく女房

八らくくし 何ひろうるらし花
うられう
やゝハあやうく
細嘉の乗乃やゝハあやる
し梅の花ーー
うらまてそみくうら
細ふう霊よ気へまがん
い梅花うまこし細くも
物をうらかられ
古のをけるを
細夕霧調業ハまけがさ
るれども此事うしてハ剃して
それうらのみくさるうとも
御 肉東づくし大将ハうとく
中がねハをとけくがうわう太を
中ねうれづく
神のまりすとかども 細 休のま
もん香をす二段の抜うり
あくれ例の作もんの調く亜素東の下まうひろさるのしとやれろ接陸よ囲しさおすお
価えつうあうし の句一方の太ねる風俗の休のまとすしいふ寺 とうろよ宮われつる挙し

がよかろハ袖を離さぬ孫名院か悦曲の宮よく神をひつゝくみく
あどもやゝはおやとすくゐりとすさ類ちりわ
月もかりし月もうきさ比かそれぐし
じうよをそけよ形ちうりのあうちるれど
めそてあんつま坤しじもめそてうしとくる経がさ
夕霧も業をとし
古肉なり
もようしにもつるのようりのまとりてらうてねる
ろう孫をすゞる所負方れあぶそれ
さ庭よ坤さあさうちとをしくて衣のもとけりも竜
客人めさされる亜宮く人あらの
夕霧の細く
亜業の実底
そとへゑくやいくつまうとうとじくして
やうにさ給のごとし
との給へばふくうとぬ陽じよ袖の中ふぬ
業のく
三八ム女の二段か業
の助言く
ど